

徒然なるままにて遊び綴る

風遊戯

神秘学ポエジー

第2集

2014/2/1 ~ 2014/6/16

神秘学遊戯団

見者	五八	開	二
発芽	五六	愚	四
出発	五四	羽化	六
えれじい	五二	夜明け	九
無明	四九	ハルモニア	一一
しらべ	四七	鎮魂歌	一三
自由	四五	物語	一五
奇跡	四二	パッション	一七
鏡	三九	冒険	一九
壁	三六	訪れ	二一
星座	三四	煩惱	二二
コスモロジ	三二	記憶の彼方	二四
うたかた	二九	うたかた	二七
コスモロジ	三二	うたかた	二九
星座	三四	コスモロジ	三二
壁	三六	星座	三四
鏡	三九	壁	三六
奇跡	四二	鏡	三九
自由	四五	奇跡	四二
しらべ	四七	自由	四五
無明	四九	しらべ	四七
えれじい	五二	無明	四九
出発	五四	えれじい	五二
発芽	五六	出発	五四
見者	五八	発芽	五六

《開》

開くために
胸の奥から
花を咲かそう
心の十字に
花を咲かそう

開くためには
閉じていなければならぬ
静かに静かに閉じていなければならぬ
ひとつになるためには
分かれていなければならぬように

むすんで
ひらいて
ひらいて
むすんで

その繰り返しの中
育まれていくもの
ひとりで生まれ
あなたと出会い
育まれていくもの
静かに静かに芽吹き
開いていく花がある

心の十字から
胸の奥の十字から
実りのための花が
天に向けて

祈りのように
咲きいでる

☆風遊戯《開》ノート

◎今日書いてみた胸にある十字架から花が咲くイメージは、シュタイナーの『神秘学概論』のなかの薔薇の像をつくる瞑想法のイメージも背景に持ちながら、書いてみました。まさに、薔薇十字ですね。

◎参考までに、その『神秘学概論』の箇所を引用しておきます。

「だから私は、例えば心の中に薔薇の像を作り、そしてそれに注目しつつ、次のように自分に語りかける。——「薔薇の赤い花弁の中で、緑色の樹液が赤く変化している。薔薇の赤い花は、緑の葉と同じように、純粋に、情熱に煩わされることなく、成長の法則に従っている。薔薇の赤は、浄化された衝動や情熱の表れとしての血を象徴している。低次の部分を取り去った、純粋な衝動や情熱は、赤い薔薇と同じ姿をしている」

私はこの思考内容を、悟性の力で作り上げるのではなく、感情の中に生かそうと試みる。成長する植物の純粋さ、情熱に煩わされぬその在り方を考えるとき、私は浄福感をもち、そして衝動や欲望をもつことは、ある種の高次の完全さを犠牲にすることにはかならない、と感じることができる。」

《愚》

どうしようもない私が現れる

私でない私が

私の顔をして歩いている

私という壁に囲まれて

私という仮面の内で

自分はいったい何をしているのだ

したり顔をしている自分を

吐き出そうとする私がいる

私が私である賢さが

耐えようもなくなるとき

どうしようもない私になつて

よろよろとぼとぼ歩くのだ

愚かになることでしか

愚かでしかありえない自分に気づくことでしか

たどり着けない場所がある

私の前に道はなく

私の後ろにつくられる道を呪いながら

それでも私という軀を逃れようと

私でない私のほうへと

おろおろびくびく

どうしようもない私を歩くのだ

☆風遊戯《愚》ノート

◎昨日の「開」を受けて書いてみました。

◎「どうしようもない私が歩いている」というのは、種田山頭火の自由律俳句のひとつ。「僕の前に道はない僕の後ろに道は出来る」というのは、高村光太郎。

◎みずからを善しとするような賢さのなかで生きることを嫌悪したくなることが多い。だれかになにかを教えることができると思えば、みずからを知らないがゆえに、何も知らないこと以外を知らないことにさえ気づけない。そういう賢さを去って、愚かさのなかに身を置きたくなることもある。

そうしなければ、あらかじめ決められた問題と答えを往復し、正解とされるものだけを選んで歩くことで、どこにも行けなくなってしまう。

みずからの愚かさや悪の迷路のなかでときに踏み迷ってみることでしか、見えてこないものを見ようとし、そうすることでしか開けない自分をただ歩いてみる

こと。
◎昨日の「開」との関係でいえば、胸の奥の十字から咲こうとする花は、蓮が泥のなかからこそ変容し咲き出でるように、その泥のなかにいる自分を見ることがからはじめられる必要があるとでもえるだろうか。

《羽化》

鳥のようにわたしは鳴く
空へ空へ空へ

地を歩き続けることに飽きて

羽ばたこうとするのか

空から大地に降り立ったことを思い出して
空が恋しいと思ひ鳴くのか

羽を育てるために

待ち続けた時が満ちる

羽化しようとするわたしの背中に

深い亀裂が入っていく

飛び立つ力をください！

わたしという器に

静かに注がれつづけた

いのちの水があふれ出すように

額の中にあつたわたしという絵が

枠を取り払われて生きようとするように

けれどその祈りは

大地を歩くことで紡がれた歌

大地を歩くことでしか

歌えない歌だということを知らねばならない

そして飛び立つことは

わたしがわたしでないものにならなくていく

深い悲しみをともなうことを

知らなければならぬ

わたしに告げる声がする

みずからの真実の顔を見よ
隠されていた真実の顔を
それは怖気立つような醜い顔

声は告げる

おまえはみずからの叡智を研ぎ

そのお前の醜い姿を

輝く光へと変えなければならぬ

これまでおまえを守ってきた大地は

もうおまえを守ってくれはしないのだから

そのかぎりない歩みとともに

おまえは羽ばたかねばならないのだ

鳥のようにわたしは鳴く

空へ空へ空へ

その声は喜びなのか

それとも深い悲しみの叫びなのか

わたしは両腕を大きく空に広げて

大空に向かって飛び立とうとする

☆風遊戯《羽化》ノート

◎実は、今日はぼくの誕生日で、「今日の音楽」もこの日からということ、ピオラ・ダ・ガンバ演奏からチェロ演奏へ。その最初ということで、カザルスを紹介することにしました。

◎それで、今回のテーマは「羽化」ということで、シュタイナーが『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』のなかで示唆している「境界の守護霊」のことを盛り込んでみました。

◎「境界の守護霊」に対するとき、秘儀参入者はそれまで知らずに自分を導いてきた叡智が、それまでのように自分を守ってくれはしないことを知らされます。そしてみずからの良き面、悪しき面それらすべてが現れてくるといいます。それまでは自分の内に担っていたものが、外からみずからに現れてくるといっわけです。内なる隠された叡智が離れていく。

◎そして「境域の守護霊」は言う。「今、私がおまえの外に出てきたことによって、この隠された叡智もまたおまえから離れる。それはもやおまえのことなど構おうとしないだろう。そして仕事をおまえ自身の手に乗ねるだろう。しかしこれからも私が墮落することは許されない。私はますます完全な、偉大な存在にならなければならぬ。もし私が墮落するようなことにならば、おまえも私と一緒に暗い奈落に引きずり込まれるだろう。――そうされたくないのなら、おまえ自身の叡智を研ぎ、おまえから去っていったあの隠された叡智の課題を引き継がねばならない。」

《夜明け》

夜明けの歌を歌おうか
明けない夜はないという

かごめかごめ

籠の中の鳥が外に出る

夜明けの晩に

すべる鶴と亀

まだまだ深い闇の中

星たちは空でまたたきながら

神秘の舞踏を遊んでる

夜が明けるときには

気をつけるがいい

光のなかに溶け込んで

星たちの歌が聞こえなくなってしまうから

耳をすませて

ほら

後ろの正面をふりかえれ

聞こえてこないかい

星たちの裏声が

ほんとうの夜明けの歌が

わたしの深い深いところから

夜明けの歌を歌おうか

星の消えない夜明けの歌を

光のなかで見えてくる

後ろの正面を歌うのだ

ほんとうの夜明けを祝うために

☆風遊戯《夜明け》ノート

◎忙しさに紛れてこのところ書いてませんでしたけど、ひさびさの「風遊戯」です。

◎「C」が近づいているなかで、あらためて世の中であまりにわかりやすく叫ばれている賛成／反対、白／黒などのようなことについて、叫ぶまえに自分がなにを見ているのか、聴いているのかを、「夜明け前」の気持ちで見つめ、聴きなおしてみたいという思いから少し。

◎光に照らされて見えてくるものはあるけれど、光によって見えなくなってしまうものもあることを忘れてはいけないように思います。それは、消えてしまっているのではなく、それを見る目が失われてしまうというか、そこに注意が向かなくなってしまうということ。

◎見えなくなっているとしたら、それを見るためにどうすればいいのかをさまざまに方法で模索してみる必要があります。そうすることで、光そのものも、なにかを隠蔽する方向ではない、ほんとうの光として顕れてくることができるのではないかと思います。そしてそれは、おそらく、見えなくさせられてしまっている「後ろの正面」にまみえるということでもあるのではないかと。

《ハルモニア》

ハルモニアを探して
わたしはこうして旅しているのか
永遠を知るために
季節のめぐりを学ぶように

わたしという音
あなたという音
その間に張られた弦を鳴らして
わたしとあなたの距離を
祈りの歌に変える

昨日と明日
生と死
若さと老い
喜びと悲しみ
そんなふたつのあいだに
さまざまに張られた弦が奏でる
ハルモニアの響きを祈りにして

とりどりの音色のなかで
語られていく数知れぬ秘密の物語や
鳥たち花たちの歌やさやぎ

耳をすませば
世界がわたしになり
そしてあなたとともに永遠を旅する
ふたりハルモニアの弦となって

☆風遊戯《ハルモニア》ノート

◎ハルモニアというのは、ハーモニー、調和。ハルモニア・ムンディとは世界の調和。

◎弦の比喻は、仏教で弛めすぎても張りすぎてもいけないという「中道」のイメージで、相反するように見えるものが、それにもかかわらず互いに調和の礎となつてその音を奏でているということの意味しています。

◎ヘラクレイトスによれば、ロゴスとはつまり、相反するもの、対立するものの両立であつて調和。「生と死、覚醒と睡眠、若年と老年は、おなじひとつのものとして私たちのうちに宿っている。このものが転じて、かのものとなり、かのものが転じて、このものとなるからである」。

◎わたしとあなたは、ある意味で、世界を構築している「うしろの正面」どうしなのだけれど、その両極が弦の両端となつて、その間に弦が張られて、それが奏でられることで世界がめぐっているのだといえるように思います。

◎わたしたちは、両極の片一方にしがみつき、その対極にあるかのように見えているもう片方を拒むことで、ハルモニアの響きを奏でられなくなっているのかもしれない。

《鎮魂歌》

死者に祈ろうとするならば

私たちもまた

死者の国から来たり

死者の国へ帰還する者であることを

知らなければならぬだろう

たとえパンドラの箱が開けられたのだとしても

それは隠されてしまっていたものが

その姿を見せているだけのことなのだ

そして箱の底には

希望の種があったことも忘れてはならない

それを育てることが

つかのま死者の国を離れた私たちの仕事になる

祈ろうとするならば

みずからを鏡に映さなければならぬだろう

そこに映るものを

みずからに問い直さなければならぬだろう

そしてみずからの姿をこそ希望に変えなければならぬ

つかのまの生者である私たちは

植えられた種に希望の水を注ぎ

そこに鎮魂の歌を吹き渡らせる

すると聞こえてくるだろう

死者たちの声が

私たちは歌う

死者と生者をともに言祝ぐ歌を

鎮魂は言祝ぎでなくてはならない

そして死者と生者をともに

揺さぶることのできる鞆（ふいご）のように
大地へ天空へと
歌を送りとどけなければならぬ

《物語》

始まりはいつか

そう聞く者がいて

永遠と答える者がいる

終わりはいつか

そう聞く者がいて

また永遠と答える者がいる

永遠とは何か

そう聞く者がいて

わたしでありあなたである

そう答える者がいる

地上に降り立ったとき

永遠は失われ

わたしの種は

まるで砂漠に蒔かれたように

その行方を失くしてしまったが

やがて永遠はみずからの内から

時間という糸を伸ばし

大地にその織物を広げた

そのように

わたしとあなたは

互いを見交わしながら

永遠を絵巻物のようにして

時間という物語を広げた

星たちは幾何学を織りなし

花たちは星たちの色を写し

鳥たちは風を空へと運び
季節は色とりどりのバトンを渡し
旅人は数知れぬ不思議の冒険を続けた

わたしとあなたの恋が物語になり
わたしとあなたの戦争が物語になり
物語は時空の織物で綾なされた

やがて
わたしはあなたになり
あなたはわたしになり
そうして巻物は再び閉じられ
始まりと終わりが
永遠のなかでひとつになる

永遠のなかで
その繰り返しを
モノローグのように物語る者がいる

風遊戯《物語》ノート

◎春分の日の今日は、占星術的には一年のはじまりだといえます。

◎占星術との関係ということではないのですが、そのはじまりにあたって、永遠が展開する「物語」というイメージをことばにしてみました。

◎イメージのなかにあつたのは、「おもちゃのチャチャチャ」だったりします。「おもちゃは はこを とびだして おどる」↓「おもちゃは かえる おもちゃばこ そして ねむるよ チャチャチャ」というイメージ。
ちなみに、その歌詞をつくったのは、野坂昭如だとのこと。

《パッション》

パッションがくる！

それを受けいれるとき

私は海を泳ぐ魚のようになるけれど

受けとめられないとき

私は洪水に吞まれてなすすべがない

たったひとつのことばで

傷ついてしまう私のパッションがある

そんなとき私は小さな杯で

あふれるほどの潮を掬おうとしているようだ

けれどもどんな運命が襲ったとしても

決して乱れることのないパッションが

私の深みには確かに隠されているのだ

それはマグマのような熱を持ちながら

深く透明な青を湛えた湖の底で

そして惑星を覆う海の深い深い底で

静かに静かに育まれている結晶のように

パッションを表そうとするならば

24色のクレヨンでは足りないだろう

500色の色鉛筆でも

1600万色や42億色のディスプレイでも

決して表すことなどできはしない

受苦のキャンパスに塗られた

無限の色彩が必要とされるからだ

パッションがくる！

陽光のように

月の満ち欠けのように

星の幾何学のように

鳥の音楽のように

花のささやきのように
そしてあなたの愛のことばのように

パッションがくる！

私は十字架の上で空を仰ぎ

大地へと血を流し

受苦のキャンパスにそれを描き

そして十字架に張られた弦とともに

パッションを奏でようとする

成就するためにこそ！

☆風遊戯《パッション》ノート

◎なんだか少しまとまりがないような気もするけれど、テーマとしては「感情の秘儀」とでもいえるものを言葉にしてみようと思って、書き付けてみました。「詩」ではなく、そういう形を借りた神秘学的ポエジーということなので、まあこんな感じですよ。

◎感情的な人、感情を簡単にあらわにする人というのは世に多いわけですけど、おそらくそういう人は、むしろ感情のキャパシティがあまりに少なく、貧しいことが多いように感じる 경우가多くあります。小さなコップに大量の水を注ごうとすれば、すぐに溢れてしまうけれど、器が大きければ簡単にはあふれないようなもので、感情の豊かな人というのは、その器が大きくてはじめて、そこに深く豊かな感情を湛えられるんだと思います。

◎仏教の基本テーマに八正道というのがあって、その基本テーマは自我が感情を制御してそれを変容させることにあるように思います。そうであってこそはじめ、垂れ流しのようでない、豊かな感情を育てることができるんだと思います。

◎そのためにも、エネルギーシユなまでのパッションを宇宙的な十字架に架ける。つまり、「聖杯」に注ぐことのできるものにしていく必要があるのだと思います。それが、「成就！」とどういってもある。

《冒険》

私は私

そのイコールで結ばれた右と左のあいだで
見えなくなってしまうものを探して
私は冒険の旅に出る

私を呪縛する

私は私という呪文から逃れ去るために
見知らぬ私の大地へ沼へ海へ空へと向かい
そこで出会うものたちの敵意さえ必要とする
それさえも愛だということを知るために

愛するために

私は私でないものを求める
愛するために

私は私でない険しい道を歩み
イコールの呪文で閉じられた
影の王国から逃れるための扉を探す

ときに私は破壊され

ばらばらになって投げ捨てられたりもするのだが
皮肉なことにイコールの呪文に救われ

私はまた私となってしまう
けれど愛を知る私として

季節のめぐりがただのくり返しではないように
私は私というくり返しの呪文から逃れ去り
またその呪文に救われながら

河の流れのように
私を流れ続ける
光と影を絶え間なく交錯させながら

☆風遊戯《冒険》ノート

◎自分という世界に閉じ込められてしまうような閉塞感を感じる時、「私は私である」ことを逃れて、それまで自分ではなかったような世界のほうへ逃れたいという衝動を覚える。それをここでは「冒険」としています。

◎ぼくは、自分にとつて苦手なことや未知のことに、定期的に「自分エポック授業」のようなことで、集中的に取り組んでみようとするのがよくあります。でももちろんそれはとてもキツイことで、自分が自分ではなくなってしまうような気持ちになりかねないときもあります。自分を成長させるというか、自分のなかの欠損を統合させるためにはぼくにとつてはとても大切な作業になります。

◎自分の得意なことを伸ばすということはもちろん重要ですけど、そればかりだとやはり世界は閉じてしまう。もちろん得意なことの底の底のほうに向かってくることで、いわば内在的超越を行うことも可能でしょうけど、それはかなりむずかしい。だから、ときに自分の殻を壊すことで、実はそれは取り組み方次第では壊れてしまうのではなく、自分の世界を広げることには他ならないことがわかります。そのための「冒険」。

◎ドウルースに『差異と反復』という著作がありますが、反復するものを同一的捉えてしまうことから「差異」が見えなくなってしまう。

◎似ているということは違うということだというのもそれに似ています。似ている面白さというのは、違いがあるからで、ものまねの面白さというのは、そこにあるわけですが、ときに「似ている」ということを「同一性」のほうに持つていつて「差異」が見えなくさせられてしまうとき、さまざまな認識のファシズムが現れます。

◎難しいのは、同じものは存在しないにもかかわらず、すべては「一」であるということなんだと思います。そして、その一なるものは多を内包している。一即多、多即一ということ。

《訪れ》

それは訪れてくる

まるで知らない者のように

そしてもうひとりのわたしのように

わたしの得たものは

かつてわたしのなくしてきたもの

得るためになくすという

数しれぬ悲しみとともに

わたしは新たなわたしへと導かれた

空のむこうに

星の世界に

わたしはあつたのかもしれない

けれどそこはここにあつて

そうしてそこに

あなたは訪れた

わたしはひとり

それともふたり

あなたはひとり

それともふたり

わたしはわたしから失踪し

あなたはあなたから失踪し

わたしはわたしでないわたしに出会い

あなたはあなたでないあなたに出会う

それは訪れてくる

ときには闇の使者のように

ときには恋人のささやきのように

ときには鳥の歌のように

わたしは指さす
 彼方にある世界を
 するとその指先は
 あなたという不思議な愛に変わって
 わたしのはるか後ろから
 静かで熱い言葉となって訪れてくる

☆風遊戯《訪れ》ノート

◎たとえばわたしたちは、考える力を得るために、さまざまな生命力をなくしてきた。論理的な考える知的な力を得ることが必要だったからだ。

◎トカゲはしっぽを切られてもそれを再生させる力をもっているが、わたしたちはそういう力をすでに失っている。歯さえ、爪のようには何度も生えてくることはない。

◎私たちは、そうした原初的な生命力を次々と別のものに変えることで、人間としての能力を獲得してきた。言葉を使って話せるというのも、そのひとつだろう。言葉を得るために私たちはいったい何をなくしてきたのだろうか。

◎私たちはさまざまなものをなくすことで、そのなくしたものを別の形で獲得し続けてきた。けれど、姿を変えたからといってなくしたものはそこにはすでにない。

◎「頭で考えるのではなく」という、感じたい人のよく使う言葉があるが、ほんとうに感じとるためには、いちどきちんと考える力、論理性を自分のものにしておく必要がある。そしてそれを越えていくために、今度はそれを手放すのだ。得ていないものを手放すことはできない。手放すことができるためには得ていなければならぬのだ。その悲しいプロセスを私たちはひたむきに歩んでいく必要がある。

◎愛というひとをむすびつける力も、いちどわたしとあなたが切り離されることを通じ、「結ぶ」という力を獲得することで得られるものだ。だから、わたしがわたしであるという深い悲しみや絶望ややりきれない苦悩をもたないで、愛へと至る道はないだろう。

◎ときに、わたしたちはなにかの「訪れ」を感じることがある。それは決して善きものだけだとはかぎらないが、まるでまさに「音連れ」のようにそれは訪れて、

わたしたちのなくしてきたものや離れてしまった人が別の姿になってわたしたちに新たな力を与えてくれる。それを拒むこともできるだろうが、必要なときに必要なものは必要なかたちで訪れてくる。禅でいうならば、「啐啄同時」とでもいおうか。

◎言葉を使いすぎているが、要は、わたしはわたしでなくなることでわたしへと向かっているということ。

《煩惱》

ひとりでいるにせよ
ふたりでいるにせよ
煩惱の花は乱れ咲く

煩惱はまるで

それと知らぬうちに血肉になった母語のように
避けようもなく

それとさえ知られぬままに

私たちの深みから立ち上がってくる

煩惱は私であるのか

その自問こそが

謎への道しるべとなる

どう転ぶか

そしてどう立ち上がるか

生きているということは

煩惱との遊戯から学ぶということだ

見えない戦場があり

私たちは結合双生児のような両義性の煩惱を
わが盟友として地を彷徨う

剣を振る私たちは

それがいったい何を斬つのかを自問し

戦うべきか戦いをさけるべきか

そのべきの往還を繰り返す

戦うことで得られる勝利も敗北も

戦わない迂遠のなかでの逡巡も

それらを真に生かすためには
あらゆる魔物と対峙しなければならない

自由と不自由に焼かれ

放縦と戒とに裂かれながら

肉を切らせて骨を斬とうとさえするが

その炎は魔物をますます巨大なものに変える

聖なるものにさえ姿を変幻する魔物に

やがて私たちは気づくのだ

その魔物は私たちそのものであることに

私たちの投げる光と影が

物語をスクリーンに映じていることに

ときに軽快に

ときに荘重に

静かな笑みで

あるいは狂騒のような高笑い

私たちの前に現れる魔物とともに踊りながら

踊ることで私たちは導かれてゆく

戦いながら戦わない場所へ

光と影を映ずる源へと

☆風遊戯《煩惱》ノート

◎仏教関係のものを読むと必ずこの「煩惱」というテーマが繰り返してている。

◎煩惱の数は限らない。そして、諸悪の根源のように描かれる。貪欲、瞋恚、愚痴、五蓋、昏眠、掉挙、疑などなど。菩薩の四弘誓願にも「煩惱無量誓願断」とかが立てられているように、煩惱を滅することが仏教の主眼であるようなところもあったのだけれど、反面、如来蔵の思想のように、煩惱があるからこそ悟りを求めようとする心、菩提心がでてくるのだとして、煩惱と菩提は相即し、而二不二であるという不二法門が説かれもした。ぼくの好きな維摩経ですね。

◎今回の遊戯を書いてみようと思ったのは、それとは少し離れて、昨日、森博嗣の剣豪小説「ヴォイド・シェイパ」シリーズの新刊、第4巻目の「フォグ・ハイダ」を読んだのがきっかけのようである。森博嗣の小説は、推理ものはあまり読まなけれど、アニメにもなった「スカイ・クロラ」シリーズやこの「ヴォイド・シェイパ」シリーズはちょっと特別な感じがあってずっと読んでいる。

◎とくにこの「ヴォイド・シェイパ」シリーズは、剣に関する物語ということもあって、自分では剣の修行などまるでしていないにもかかわらず、戦うことなどについて深く考えさせられることもあって、とても魅力を感じている。

◎帯にもなっているところを今回の「フォグ・ハイダ」から引用しておきたい。「どんな場合でも、戦うことは容易い。戦わないことに比べると、それはいつも近道に見える。」剣とは、人を斬らなければ答えが出ないものなのか。であれば、侍の真実とは、人を殺して、わかるものか。

《記憶の彼方》

忘れてゆく

そして忘れてしまったことさえ
忘れてしまったとき

私にはなにが残されているのだろう

私という現象は偏屈な記憶の集合体で

そのジグソーパズルのピースを

ひとつひとつなくしていくならば

やがて私は私でさえなくなっていくのか

それまで使っていた文字が

一文字ずつ使えなくなっていくように

言葉で組み立てられていた世界が次第に蝕まれ
やがて私という現象が灯らなくなるのだろうか

私であったもの

私であると思っていたもの

それがひとつひとつ失われ

中心に残される最後のピースさえも

なくなってしまうと想像せよ！

そこからしか

はじまらないものがある

なくなるはずのないものが

なくなってしまうときにこそ

うしなわれないなにか

私という現象の奥で

ピースを並べまた解体しているもの

光から閉ざされたとしても

光の不在をさえあらしめているもの
 すべての抛り所をなくしてしまったときにこそ
 その見えないものの源が顕れる
 記憶と忘却の果てのカーテンコールで

☆風遊戯《記憶の彼方》ノート

◎私たちが自分だと思っているもののほとんどは、「記憶」の断片の集積で、それらの「記憶」に対してさまざまに執着しながら、それらのつくりだしている世界のなかで「自分は自分だ」と思い込んでいるところがあります。そうしたなかで、それらの「記憶」そのものが失われてしまうとしたら、いったいどうなんだろうか。

◎ヌーソロジー的な表現を使っていえば、「記憶」の「幅」が失われたときに、その「奥行き」にはいったい何があるんだろうということでもあります。

◎自分を目に見える「からだ」や、見えなくても自分だと思い込んでいる「ところ」だと思いついていたら、それらが依って立つものが破壊されたり失われたりすれば、自分そのものが存在しなくなるしかないわけですが、問題はおそらくその「先」にある。

◎今回の書くきっかけになったのは、漆原友紀『蟲師特別篇 日蝕む翳』でした。今、『蟲師』の愛蔵版が刊行されていますが、今回はほんとうに久々の新作。

そのなかにこんなところがありました。「日々の中心にあったもの／無くなるなど考えもしなかったものを失ったとき／人が抛り所とするものは／代わりに中心とすべきものは／一体何だろう。」

◎シュタイナーの『いかにして超感覚的世界の認識を得るか』にも、水の試練というのが紹介されていて、それは「底に脚がとどかぬ水中では、どこにも足場がないように、この試練の場においても行為する人間を支えてくれるものがどこにもない」とあり、さらなる試練として、「この試練にはどんな目標も感じられない・・・すべては彼自身の手委ねられている。何ものも彼を行為に駆り立てようとはしない。・・・どこへ向かっていいのか、自分自身の他には、自分の行くべき方向を示し、自分の必要とする力を与えてくれるような何ものも、何びとも存在しない」という試練があるといえます。

◎こうした「試練」はある意味で、至極当然の部分でもあるのですが、今回の「風遊戯」では、この「試練」をさらにすすめたところで、「自分自身」という根拠のところ失われてしまったら、というのがテーマとなっています。

◎書きながら、筒井康隆の『残像に口紅を』という名作。たとえば、「あ」という文字が使えなくなると、「愛」も「あなた」も消えてしまうように、言葉がひとつひとつ消えつづけるといふなかで執筆する小説家の話を思い出したので、少し入れてみました。

◎「私という現象」はもちろん、宮沢賢治から。

《うたかた》

変わらないものはあるのだろうか

その問いは河の流れのうたかたのように

浮かんで消えながら

天使の悲歌のように

繰り返し繰り返し奏でられる

生きとし生けるもの

ありとしあらゆるもの

その源にあるものは

悲しみなのか

歓びなのか

それとも驚きなのか

答えの用意された問いは

すでに問いでさえないから

私は答えのない問いへと旅をする

問いと答えが刹那に点滅する幻の前に

変わらないものを求めて旅する者が

やがて無常こそが永遠であることを知るように

答えのない問いに向かう私は

みずから私でない私であることを知る

悲しみは悲しみのままで

歓びは歓びのままで

驚きは驚きのままで

答えそのものでもある問いとなって

たゆたい流れかつ消えかつ結び

私をさまざまに現象させてゆく

ああ変わらないものはあるのだろうか
 問いが数々の流れとなり集まって大河となり
 やがて海へと流れ込む
 その海を永遠と呼ぶとしても
 やがては姿を変えて天へと上昇し
 またあらたな問いとなつて降り注ぐ

うたかたのめぐりの歌を歌おうか
 悲しみのしらべ
 歓びのしらべ
 驚きのしらべを
 私という楽器にのせ
 永遠を問いそのものにして

☆風遊戯《うたかた》ノート

◎あえて説明する必要もないでしょうけど、鴨長明の「方丈記」のモチーフを使つて、「うたかた」ということについて書いてみました。ちよつと説明的でくどくなつた感もありますが、まあ、ノリで。

◎「うたかた」というのは、水に浮かぶ泡沫であり、はかなく消えやすいものたたとえば、語源は「うくたまかた（浮玉形）」の転じたもので、「浮きて得がたきもの」の略。「うたかた」の「かた」は「形・型」のようですが、「うた」についてはよくわかつていないようです。そこで、ここではちよつと勝手にその「うた」を「歌」としてとらえてみました。単にはかないというイメージのうたかたというよりも、「うたかたの恋」にもつながるような、はかなくもあり、せつなくもあり、またそれが生きる熱にもつながってくるような、そんな「うたかた」として。

◎その「うたかた」そのものに、ここでは「問い」を投げてみました。「変わらないものはあるのだろうか」と。永遠とは何かと。そこで、悲しみと喜びと驚きという哲学の源にあるとされるものを重ねて。

◎西田幾多郎は「悲」を哲学の根底に置きましたが、西洋哲学の源流近くにいたアリストテレスは哲学の根底に「驚き」を置いています。「歓び」の哲学というのはあまり聞きませんが、あえていえばエピク羅斯の快樂主義でしょうか。快樂主義という表現は誤解されるところも多いですが、実際のところは、このエピク

ロス学派は「俗世を避けた隠者」のような存在だったようです。いわば、足るを知る生活において認識そのものの快楽を事としたということかもしれません。エピックロスに対照される存在としては、その同世代のストア派のゼノンでしょうか。

◎ここでは万物を流転しているところえたヘラクレイトスもイメージしながら書きました。ヘラクレイトスは変化と闘争を万物の根源とし、万物の根源（アルケー）を「火」ととらえていたようですから、イメージとしてはむしろ「万物のアルケーは水である」としたタレスのイメージでもあります。

◎「めぐりの歌」は、もちろん宮澤賢治の「星めぐりの歌」から。「あかいめだまのさそり／ひろげた鷲のつばさ／あをいめだめの小さいぬ・・・」。

《コスモロジー》

ひとりのときは

ひとりとともにありなさい

ふたりのときは

ふたりとともにありなさい

あの空の彼方に

宇宙はあると思うのかい

永遠へとつながる

魔法の道があると思うのかい

悲しみのときは

悲しみとともに

喜びのときは

喜びとともに

好きも嫌いも

あなたとともに

パンドラの筐のなかにあったものは

いったいどこに追いやられてしまったのだろう

それらが自分の宇宙ではないかのように

希望だけが残されていると思うのかい

それを抱きしめながら

彼方に何かを探さなければならぬかのように

私は死なない

私が死とともにあるときに

私は苦しみを超える

私が苦しみとともにあるときに

私は悪を恐れない

私が悪とともにさえあるときに

私は宇宙になる

私が宇宙とともにあるときに

☆風遊戯《コスモロジー》ノート

◎コスモロジー（宇宙論）のポエジーを書いてみました。大きな望遠鏡を出して宇宙の彼方になにかを探すようなことでも、相対性理論や素粒子論のような理論的な宇宙論を論じるのでもなく、自分が今ここにいることそのものを宇宙を生きるということにするというポエジー。

◎「臨床」（医療・教育・カウンセリングなどでの現場を重視する立場）ということが、ようやく少しずつ重視されてきているところがあるけれど、逆にいえば、ほとんどの場合、現代の世界観では、自然科学的な客観主義が克服されているようには見えない。むしろ、その逆で、さまざまなのがいわゆる「グローバリゼーション」のように、標準化されてしまおうとしているように見える。その標準化は、さまざまなもの自分から追い出してしまおう。死などのような「見たくない」ものを見せないようにしながら。そうした追い出されたものこそが、重要であるにもかかわらず。

◎ひとの苦しみも恐れも、自分という永遠の宇宙のなかから自分の嫌いなものを放り出してしまうことで、それらが外から自分を襲ってしまうことから起こるのではないか。

◎自分だけが正しくて相手は間違っていると言いたい人は世に満ちている。まるでそれを生き甲斐のようにして。正義は我が手にあつて、悪は相手とともにあるといたいのだらう。しかし、どんなときにも、正義も悪も自分のなかにあるのだということを忘れてしまったときに、人はともすればさまざまな愚行へと向かってしまうことが多い。そして容易にその正義は裏返った悪となって自らをも襲うことになる。

◎先日、宮崎駿のこんな言葉をツイッターで知った。

「悪いやつをやっつければこの世はよくなるという考え方、

あれはもうやめようと思っている。

そうじゃなくて、

こうなったのはみんなのせい。

みんなと一緒にやっちゃったんだというふうに思わないと、

なにも道は生み出せないと思う。」

(宮崎駿 pic.twitter.com/j1WemoyY2q)

◎ひとりではいられないから、ふたりでいようとするときには、そのふたりはふたりになることができる。あいてもじぶんもひとりのままで、その孤独はただの孤独のまま。ふたりでいるときには、ふたりでいることができなければならぬ。ふたりでいるためには、愛が必要になる。ひとりでいることができるというだけではじめて成り立つ愛。

《星座》

天空に星を見つけるように
自分のなかにも星を見つけ出すためには
新しい魂の力が必要だ

ぼくのなかの星は
見つけられるのをずっと待ち続けているけれど
見る力をもたなければ見ることはできない
見えないものを見る力

いちばん大切なものは見えないものだ
見えるものはやがてなくなってしまふものばかり
だけれど

いつもぼくのずっとそばに
いる大切なものは
見えないものばかりだ
愛や希望や勇氣のように

ぼくのなかの星をつなげてみると
それらは星座のかたちになって
ぼくに語りかけてくる
まるで魔法の言葉のように

見えないものを見る力は
あなたのなかの星も見せてくれる
そしてその輝くような星座の言葉も
けれどその言葉を聴きとるためには
ぼくのなかの星座の言葉が必要だ

ほんとうのあなたは目には見えないから
そしてあなたもほんとうのぼくは見えないから
ぼくらはそれぞれの星座の言葉で語り合いながら

見えない姿で星のダンスを踊り
 燦めく天空の星たちの新たな物語を紡ぎはじめる

☆風遊戯《星座》ノート

◎今回の《星座》は、自分のなかのさまざまな見えない星たちが、みずからの魂の力を育てることで、新しい神話を創っていくことができるのではないかということを書いてみました。別の表現をするならば、新しい物語を生きたための魂の創造性の試み、とでもいえるでしょうか。

◎ちなみに、天球の恒星は、ギリシア神話では神話のなかの人物や動物や道具などに見立てられ、古代ギリシャでは48星座。その後、南天の星座も加えられて、現在では全天は黄道で12、北天で28、南天48で88星座あるとされているようです。

◎さて、「コンステレーション」(星の布置・配置)という用語があります。ベンヤミンの『パサージュ論』なんかでもでてくるので、その筋の現代思想が好きな方にも馴染みがあるかもしれませんが、ここではユング心理学での「コンステレーション」のほうの意味をイメージしています。一見して無関係にそこに配置されているだけのように見えるものが、そこに星座のように意味を含んだものとして見えてくるといったような意味です。

◎しかし、そのコンステレーションは、それまで気づいていなかった配置がわかるというような、客観的な意味合いであるというのではなく、それを見出すことそのものに重要な魂の働きを見るところといったものだと思っております。

◎それは、ある意味、これもユング心理学では重要な述語の一つですが、「シンクロニシティ」に近い部分もあるとぼくとしては理解しています。因果律ではなく、一見偶然のように見えているもののなかに、まるで星座の神話のような意味が見出されてくるともいいたらいでしょうか。

◎人と人のあいだの関係も、ただ三人称的に対するような見える部分だけしか見えないとしたらとても悲しいことで、互いの星座の物語を共有しあうような、そんな見えないけれど永遠にもつながってくるような関係性が大切なのではないかと思えます。それは、もちろん死者との関係も同様で、そのためにも、みずからの内なる死者の星座も見出す必要があるように思っています。

《壁》

見えない壁の向こうで
見えないきみが
見つめているのは
見えないぼく

見えない壁に向かって
ぼくはパントマイムのように
おどけて踊ってみせる
そしてときおり
見えないきみにむかって
ひとさし指を向けたりもする
そして見えないきみも
ぼくにひとさし指を向ける

見えないぼくと
見えないきみが
見えないところで見つめ合う

見えない壁がある
超えることはできるのだろうか
記憶の壁
死の壁
宇宙の壁
そしてぼくときみの壁

ふと孫悟空の話を思い出す
この世の果てまで辿り着いたと思い
そこで見つけた大きな石に印をつける話
けれどそれは釈迦の手にすぎなかったという
釈迦の手は壁だったのだろうか

それとも悟空自身の壁だったのだろうか

壁はどこにあるのだろう

見えない壁がぼくの世界の壁をつくる

壁であるとさえ気づかないまま

気づいていても

超えられないという諦めで

壁がぼくを囲んでいるのか

それともぼくが壁をつくりだしているのか

ぼくは見えない壁に耳をあてて

見えないきみの声に耳をすませる

青空の向こうの

見えない星たちの物語を観ようとするように

☆風遊戯《壁》ノート

◎今回の「壁」というテーマは、シュタイナーの『自由の哲学』のなかで示唆される「認識の限界」についてのものでもある。認識にはほんとうに限界があるのかどうかというテーマ。そこで示唆されるのは「物自体」という限界を超えるためのアプローチでもある。もちろん、なんでも認識できる方法があるとかいう話ではなく、認識の限界だとされている境界を越えていく方向性が可能なのかどうかということ。

◎おそらくいちばん悲しいのは、自分が認識できているかどうかにさえ気づかないまま、「壁」の内側で自足してしまっていることなのだろうと思う。少なくとも、今自分はなんらかの「壁」のなかにいるということに気づくことから始める必要があるのだろうか。

◎「壁」のイメージのひとつに、村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』がある。一角獣が生息し「壁」に囲まれた街（『世界の終り』）に入る話。その「壁」の中の世界はやがて、『ねじまき鳥クロニクル』のなかの「井戸」のなかに降りていく話に展開しているようにぼくは思っている。そして「井戸」の底はどこかに通底する。

◎シュタイナーは、たとえば『シュタイナーの死者の書』（ちくま学芸文庫）のなかで、ベルクソンを引き合いにだしながら、私たちの記憶像が霊的体験のはじまりだと示唆している。そしてその記憶の向こう側へと向かう道について語る。

◎またその連続講義のなかで。ジオルダーノ・ブルーノの言葉を引いている。「諸君が広大な天空を見上げるとき、太陽も諸惑星も地球の周りを回っているように見える。そして、青空は青い壁のように見える。この青い壁は、諸君の認識能力、知覚能力がそこまで達していないために、そのように見えるのだ。しかし、諸君の限られた感覚が壁しか見ようとしないうところには、無限の空間が拡がっている。そこには無限の宇宙が存在しているのだ。」

《鏡》

光あれ！

けれど

光を見ることはできない

光を見るためには

光を映す幕が必要なのだ

私よあれ！

けれど

私を見ることはできない

私を見るためには

私を映す幕が必要なのだ

私は私であることを知るために

自分に自分を映す鏡をつくる

私のからだは私の鏡

私の心は私の鏡

私は反転した私のなかで私を見る

だから私があなたに会うと

反転した私のからだと心が

ほんとうのことを言おうとして

反対のことを言ってしまったりもする

ほんとうは違うんだと叫びながら

愛は憎しみに

喜びは悲しみに

慈しみは傷つけあいに

私は私というこの世界の鏡のなかで

美しさと醜さ

善いと悪い

長いと短い
高いと低い

ほんとうは分けたくないふたつのあいだを
絶えまなく反転し続けながら生きている
まるで悪夢のように

私が私であろうとするための鏡の世界で

私よあれ！

鏡の間で

自分を限りなく映しあいながら

けれど私はここにいます！

映せない私がここにいます！

時空の鏡という

永遠を映す幕で

私は私の限らない夢を演じている

あなたという私の鏡と戯れながら

☆風遊戯《鏡》ノート

◎永遠を見つけるのは簡単だ。けれどそのとき自分は自分を「分かる」ということはできない。自分を「分かる」ためには、自分を分けてなにかに映さなければならぬ。苦しみも喜びもそこからはじまる。

◎光そのものを見ることはできない。私たちに見えているのは、光を反射するものでしかない。だから光を見た！ということとはできない。しかし、見るということのは、光のなにかしかを垣間見せてくれたりもする。

◎「美しさと醜さ」「善いと悪い」「長いと短い」「高いと低い」というのは、いうまでもなく「老子」から。美しいとみんなが思うから醜さがそこからでてくる・・・。けれど、美しいものを見る事ができるといふのは素晴らしいくもある。問題はその二項対立的な発想をいつまでも持ち続けることだと思ふ。二項対立を踏まえながら、それがどこからできてきているのかに気づき、その境の意味を認識しながらそれを超えようとすることが大事なんじゃないかと思ふ。

◎ 私たちは、胡蝶の夢のような世界を生きているともいえるのだけれど、時間と空間による世界が永遠から生まれてきたのも、その限らない遊戯のためじゃないかという気がする。世界は苦であり悲しみでもあるのだけれど、そしてそれは悪夢であることも多いのだけれど、喜びや愛を生きることが出来るのだから。

◎ さて、シュタイナーの「死者の書」から、肉体が鏡であることについてのところを引用しておきます。地上で肉体を自分だと思えなしたら、私たちは霊的に不完全なままの存在で霊界を生きることしかできなくなると言います。私たちは、はるかな理想のために、つまりより成長できる可能性を得るために、この地上で肉体を自分だと思いつつ生きる必要があるわけです。もちろん、肉体は鏡であるという認識を持ちながら。以下、引用です。

◎ 「完全な自我意識に到ることが出来るのは、私が語った「遺体ファントム」を肉体の中に形成することによってのみなのです。私たちは肉体という透明な本性に鏡の裏を張らなければなりません。肉体が完全な鏡となったときはじめて、「私は私だ」と言える自分を感じる事ができたのです。

しかし完全に鏡の裏を張る行為は、ゆっくりと時間をかけてなされました。それは人類史の進化の過程を通して行われ、ゴルゴタの秘蹟が生じた時代に完成されました。その時代に鏡の裏が完全に張られたのです。それ以前には、まだいつも「上」と「下」とが人間本性の中で出会っていました。しかし肉体の鏡が出来上がり、人間が肉体からの反映だけを知覚するようになったことによって、「上」と「下」が完全に遮断されました。」「In Christo morimur (キリストにおいて死ぬ)」

《奇跡》

花びらが風に舞い

わたしの手のひらに落ちる

偶然がどうしてここに来たのか

わたしはそれを知らない

手のひらにある偶然は

わたしがこうして生きている偶然であり

あなたと出会う偶然でもある

そしてだれもが死を迎えるという必然と

それは何も変わらない

それを何と呼べばいいかわからないけれど

偶然と必然を然るべく流れている河のことを

奇跡とでも呼んでみようか

奇跡を特別なことだと思うのかい

然るべく奇跡は実るのだろう

種を植え芽吹かせ育て花を咲かせ

そうして実りを迎えるように

奇跡の奇は大きな可能性

跡は足で繰り返し歩むこと

偶然と必然の河を静かに泳いでいくように

わたしたちは奇跡を生きている

奇跡のうちに

わたしは生まれ

奇跡のうちに

あなたと出会い

奇跡のうちに

やがて死を迎える

ひとひらの花びらと出会うように

奇跡はわたしとともにあり

苦しみさえも友として

静かに静かに熟していく

☆風遊戯《奇跡》ノート

◎ いがらし・みきおの漫画『ぼのぼの』のなかの名言にこういうのがある。「じゃあどうしてその石に偶然が来たの？」。(ぼのぼのたちがトドに襲われたとき、スナドリネコさんが石を投げてトドから助けしてくれるのだが、スナドリネコさんが「この石はお前を助けたんだから、その石はお前のことが好きなんじゃないか？」と言われたのに対し、アライグマくんが「そんなの偶然に決まってるだろ、偶然そこにあつて、偶然スナドリネコさんが投げたんだ」と言ったのときに、ぼのぼのが言った言葉)

◎ 神秘学的に言えば、それを偶然だというのは認識力の欠如だということ。どんなに理由がはっきりしていたとしても、自分がそれに気づかない限り、それは偶然と位置づけられる。

◎ けれど、それを必然に置き換えてしまうことはできないだろう。そこに自由がなくなってしまうから。だから、偶然と必然のように見えるなにかの根底にある「然」のなかにながしかを見つける必要があるのかもしれない。自然とは自ずから然らしむるものであるととらえるように。その自ずからの「自ず」のところに、ひよっとしたら奇跡のすべてがあるのかもしれない。

◎ 奇跡という漢字を見ていたら、「奇」という漢字は「大十可」、「跡」という漢字は「足十亦」。大きな可能性を自分の足で繰り返し(亦)歩むとでもいおうか。そんなことを勝手に思った。

◎ 奇跡をミラクル!のようにイメージするとおかしなことになる。起こったり、起こしたり・・・というように。特別なこと、「起こり得るが極めて可能性が低い」という印象があまりに強くなってしまふからだ。「奇跡」で救われたりすることもあるのかもしれないが、それはほんとうは大切なことじゃない。大切なことは、あらゆることを、存在そのもの、いまここに自分がいること、あなたがいることそのものこそが神秘的なことであり、奇跡そのものだと思えることが大切なことだと思う。

◎ 「奇跡のリンゴ」という2013年制作の映画がある。無農薬リンゴの栽

培に成功し、「奇跡のリンゴ」とし話題を集めた青森のリンゴ農家・木村秋則の実話を映画化したもの。

◎そこで使われている「奇跡」は、偶然と必然をながれる「然」を育てたことで可能になった「実り」なのではないか。奇跡は実る！だから、実らせるべく歩まなければ、実りはない。もちろん歩んだからといって、必ず実りが得られるというでもない。しかも、日本の神話にもあるように、穀物や食物の神のオオゲツヒメは、スサノオに斬り殺されたことで、その頭から、蚕が生まれ、目から稲が生まれ、耳から粟が生まれ、鼻から小豆が生まれ、陰部から麦が生まれ、尻から大豆が生まれた、とある。（「古事記」ではツクヨミがウケモチを殺す話になっているが）

◎実るというのは、その意味で、高次の存在の供犠を必要とする。そのように、私たちのさまざまな意味での「実り」というのも、私たち自身の供犠を必要とする。仏教では「四苦八苦」とされるものも、ある意味、そうした供犠なのかもしれない。けれどそうした「供犠」は、存在の「然」を、つまり「奇跡」そのものを生きたことで、「実り」に変容し、甦る。それをシュタイナー的に三位一体の秘儀として表現することもできるかもしれない。「神から生まれる」「キリストにおいて死ぬ」「聖霊によって甦る」。

《自由》

洪水がきて

箱船に積むものを探す

わたしのいちばん大切なもの

断崖にぶら下がっているとき

少しでも身を軽くしようと

抱えているものを捨て去るように

過去のひとつひとつを諦めながら

残せるものは何だろう

パンドラの箱の底に

最後に残っていた希望

それともまだ見ぬ自由か

岸辺のない海原を漂い

どこへ行こうというのか

放った鳥はどこへ

海と空だけを見つめる

永遠にも似た閉塞

洪水はわが魂に及び

わたしはわたしの向こう側で

はるかに臨むのだ

わたしが芽吹かせ育てなければならぬ

自由の枝を啜えた魂の鳥が

やがて帰還するのを

☆風遊戯《自由》ノート

◎今朝、通勤している車から白い空を見ていたら「洪水はわが魂に及び」という言葉が浮かんできた。これは、旧約聖書のヨナ書にある言葉でもあるけれど、高校のときに読んだ大江健三郎の小説のタイトルとして印象に残っている。

◎その内容と今回のポエジーが関係しているわけではないけれど、その小説でいちばんよく覚えているのは、医師に白痴と診断された主人公の太木勇魚の息子のジンが、五十もの鳥の声を聞き分けて、クロググミですよ、オオルリですよ、センドタイムシクイですよ・・・といつて報告するシーンだったりします。なんだか、自分がその子どもになったような気持ちだったりしますが・・・。

◎「洪水はわが魂に及び」・・・。今、世の中に起こっている、不穏そうに見えるさまさまを「洪水」としてとらえることもできるだろうけれど、その「洪水」は「わが魂」にこそ起こっているのではないかということ。そのようにとらえなければ、ただのフアナティックな社会批判にしかない。

◎さて、今回は「自由」について思いつくままに。「自由」といえば、シュタイナーの『自由の哲学』が浮かぶけれど、そこで論じられていることが理解がたいことがあるとすれば、それはなにかの束縛があって、そこから自由になること・・・といったイメージでとらえているからかもしれない。

◎シュタイナーが示唆しているように、人間は一般的にいつて自由か不自由かということとはできない。もちろん、自由でも不自由でもあるのだけれど、基本的に、いわば自由になるためには「霊的再生」を経る必要があるという。つまり、「自分の行為の法則性をみずからの法則性として貫いた者は、この法則性の強制と、不自由を克服したのである」ということでもある。

◎「生きた思考」と「死んだ思考」の違いというのもそのことに関係しているともいえるかもしれない。外的な法則性のもとにある思考は、それらに賛成しようが反対しようが、そこから自由であるとはいえない。死んだ思考である。もちろん、なんでも自分勝手な法則のもので思考するということが必要だというのではなく、みずからを霊的／精神的に高次のものへと再生させるための思考の種をつくりだし育ていなければ、自由を獲得することはできないということである。

◎ヌーソロジーでいう「幅」と「奥行き」の違いもその類比でとらえることができるかもしれない。「幅」には自由がないが、「奥行き」は「自由」の可能性に向かって開かれている、と。

◎ちなみに、「岸辺のない海」は、金井美恵子の小説のタイトル。小説の内容はともかくとして、そのタイトルのイメージは、シュタイナーの示唆している「水の試練」にも似ている。どこにも足のつかないところで、つまり、外的なさまさまな権威に依ってではなく、もちろん権威に対するアンチでもなく、みずからを根拠として生きるということ。

《しらべ》

いのちはしらべ
しらべのなかに
わたしはありて
あまねくみちて
いのちをつむぐ

はるははなのしらべ
なつはとりのしらべ
あきはつきのしらべ
ふゆはゆきのしらべ

きせつのしらべうたいつつ
わたしのしらべかきならし
いのちのめぐりくりかえし
ときのかなたにめぐりきて
せつなにうまれしにゆけば
ほしのひかりをみにうけて
しらべとともにそらにまう

しらべよしらべ
むねのおくから
ほどぼしるもの
ときのかなたを
よびよせるもの
しらべとともに
わたしはいきる

☆風遊戯《しらべ》ノート

◎今回の《しらべ》の誘い水になったのは、岡潔のエッセイ「生命」。ちょうど文庫になった『春風夏雨』（角川ソフィア文庫）のなかにおさめられていたエッセイで、そのなかに「生命というのは、ひっきようメロディーにはかならない。日本ふうにいえば、「しらべ」なのである」というところがありました。しかし、今回はとくに神秘学のエッセンスというほどでもなく、浮かんで来たことばをつらつらと書きつけてみた感じ。たまには、こういうひらがな調も理屈っぽくなくていいかと。

◎あと、道元の和歌「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すすしかりけり」というのも季節のイメージの背景にあります。道元の和歌は49首伝わっています。これが最も有名な歌。「正法眼蔵」のイメージからすると、和歌の道元というのは意外な感じもするのですが、道元は、新古今集の歌人である九条家の慈円が大叔父です。後鳥羽院宮内卿らと親交を結んでいたというのもあって、歌を詠むことは近しかったようです。ちなみに、道元の和歌について関心をもったのは、松本章男『道元の和歌・春は花 夏ほととぎす』（中公新書/2005）から。

《無明》

闇のなかで
闇を知らず
明のなかで
明を知らず

みずからの
闇と明

その問いを持つ者は
やがて闇のなかで
みずからの闇を知り
明へと向かい
明のなかで
みずからの明を知り
闇を照らす道に向かうだろう

秘密を求める必要はない
秘密は隠されてなどいないからだ
ただそれを読むためには
みずからのつくりだす
闇と光の言葉が必要となる

闇のなかで
闇を見るためには
小さな小さな光を探すといい
光のなかで
天空の星が見えないならば
深い井戸のなかに降りていくといい

見るために必要なのは
みずからが闇と光の言葉となって

天と地を戯れ踊ること
その軌跡が言葉となり姿となって
わたしの前に照らされる

闇のなかで
闇を知り
明のなかで
明を知る
無明を照らす言葉とともに
わたしは戯れ踊る

☆風遊戯《無明》ノート

◎無明というのは、明るく無いと書くが、明るく無いことが問題なのではなく、自分がそれに気づいていないということが問題なのだろう。キリストが十字架の上で「父よ、彼らを赦してください。彼らは自分が何をしているのか、わかっていないからです」ということに類したこと。

◎無明の自覚を持つというのは、無知の知と似ている。みずからが知らないことに気づくことはむずかしい。そしてそれ以上に、みずからの光の欠如に気づくことはむずかしい。自分は知っている、気づいていると思いたがるからだ。

◎岡潔のエッセイ「無明」から。「今の世相は、芸術家は美を知らず、学者は真を知らずというありさまだが、そんなふうにさせてしまっているその本体こそ、無明というものではないか。そして無明の働きに対して、全く警戒を忘れているのが現状ではなからうか。それどころではなく、無明を働かせるのが生きることだと思っている人すら多い。」

◎岡潔は、理解には「信解」「情解」「知解」があつて、それぞれの理解の射程・ものさしが違い、深さも違うという意味のことを言っている。いうまでもなく、もっとも狭く浅い理解が「知解」である。「知」にはそれが必要とされるシチュエーションがあるわけだけれど、それはいつてみれば、ほんの小さな部分に光を当ててフォーカスさせるような理解の仕方にすぎない。けれど、深い深い理解へと到るためには、その光の射程を無限に近いところまでひろげていかなければならない。芸術や叡智における真善美、そして妙というのも、そういう理解のレベルを必要とする。

◎最初の岡潔の引用にある「芸術家は美を知らず、学者は真を知らずというありさま」というのも、そこには真善美妙が見あたらないからだといつてもいいかもしれない。よく学者の象牙の塔的なあり方が指摘されるのも、それは単に俗世間

から離れているという閉じ方だけではなく、そこにあるきわめて偏狭な知に真善美妙が欠けているというこのほうが問題だといえる。

◎ゲーテは最期に「もつと光を」と言ったといわれるが、みずからの無明を明けようとするには、そのようにみずからに本来の光が必要なことに気づくことが最初の一步となるように思う。そしてそのためには、みずからが闇のなかにいることに気づき、その闇にとらわれることなく、闇とともに生きることさえできるよくなることだろう。そうすることではじめて、真の光のほうへ向かうことができる。

《えれじい》

さかなのように
あめのなかを
およぐときは
なみだなんか
とけてゆくのか

とりのように
かぜのなかで
うたうときは
かなしいゆびを
まわすのか

もぐらのように
だいちのなかを
めぐるときは
せつないやみを
おどるのか

はなのように
ほのおのいのち
さかせるときは
こいするむねが
さけるのか

☆風遊戯《えれじい》ノート

◎このところ、少しばかり「鬱」なものもあって、えれじい／エレジー（悲歌）
生きる悲しみを「四大（地水火風）」のイメージで歌ってみました。

◎おさかなは「水」、とりは「風」、もぐらは「地」、そしてはなは「火」。今回も
以前のひらがなヴァージョンと同じく、とくに深い神秘的なものを表現しよう
とはしてません。ふとでてきたことばからの遊戯です。

◎なんだか雨っぽい季節になった感があつて、「雨が空から降れば」（作詞は別役
実、作曲・歌は小室等）という曲を思い出したことをきっかけに、ふとことばが
でてきました。

◎「雨が空から降れば おもいでは地面にしみこむ・・・雨の日はしょうがない
公園のベンチでひとり おさかなをつれば おさかなもまた 雨の中」。おさ
かなが雨のなかを泳いでいるイメージができたので、そこから。

◎雨のなかを涙がとけて、悲しみを指にからめ歌い、闇の中をせつなく踊り、そ
して花が咲く（裂く）ようにむねが破裂していく・・・悲歌。

《出発》

手荷物はいらない
必要なのは勇氣だ

勇氣がないなら

ユーモアをもつがいい

自分さえも笑い飛ばせるような

そんな洒落でもひとつ

食べればおさまる空腹のように

手にすれば失われてしまう

欲望という名のわたしのさまざまな影

光を求めれば必ず現れてくる幻

そんな幻さえも導き手として

迷いながらも出かけるんだ

まだ見ぬはるかな場所へと

だれかがわたしを呼んでいるのか

わたしがだれかを求めているのか

幻灯のように予感がぐるぐるとまわる

満たされることを求める欲望よりも

どんなときにも失われることのない

たしかな星の印を胸に刻んで

叫びたいほどの不安や痛みが

襲いかかってくるとしても

それさえわたしがわたしへとむかうための

大切な道しるべになると信じ

歩きはじめるんだ
わたしのなかに秘められているはずの
アルファとオメガが焦点を結ぶ場所へ

☆風遊戯《出発》ノート

◎少しばかり古めかしいフォークソングのようなノリになりましたが、「出発」のポエジーです。

◎どこへ向かって出発するか。それは、まだ見ぬ場所であり、同時に自分のなかの原点ともなった場所でもあります。アルファでありオメガであるということ。

◎自分の外へと何かを求める行為としてなにかを求めるということは、欲望の充足に他なりません。食欲や物欲や性欲や睡眠欲など、さまざまな欲望のこのを見ればわかるように、それらは満たされたときに失われてしまうようなほかないもの。そしてまた性懲りもなく甦ってきてわたしたちにつきまとい続けます。

◎そうした欲望というのは、光がつくりだす影のような存在でもあって、その影は、仏教でいうような四苦八苦そのものでもあるのですが、その影がなければ人は生きていくことができません。けれども、その影の根源には光があります。光があるから影ができるわけです。そのように、影の根源には、満たされたとしても決して失われることのない光、光の源があるはずで。

◎影さえも導き手としながら、見えない光の根源へと向かって「出発」すること。オメガへと向かうことがアルファへの帰還でもあるような、そんな「出発」を表現できればと思いました。

◎『わたしはアルファであり、オメガである。』というのは、ヨハネの黙示録一章八節。

◎前回の風遊戯の《えれじい》の関係で、小室等の「雨が空から降れば」をご紹介しましたが、その小室等の率いる六文銭というグループのヒット曲に、上条恒彦の歌う「出発の歌（だびだちのうた）」というのがあったことを思い出したのがきっかけかもしれません。

* You Tubeに映像があります

上条恒彦と六文銭『出発の歌・失なわれた時を求めて』（一九七一年十一月、発表）
<http://www.youtube.com/watch?v=r1WNbtM2jHc0>

《発芽》

種のなかでは魔法が踊っている

やがて芽を出し空へと向かっていく力と

それをささえる大地へと根をのばす力

大いなるふたつの力が均衡され

熟しながら静かに静かに踊っている

精霊たちは大地のなかで跳び上がる

水と土のあいだで

植物たちを空へ空へと押し上げている

地上を絶えず憎みながら

カエルになんかなってたまるものかと

わたしという種は闇のなかで時を待つ

闇のなかでは星たちの声がきこえるから

星たちは語るのだ

その苦しみは喜びの種なのだ

天へと向かうには大地の支えが必要なのだ

熟していく

熟していく

発芽する力

沈黙のなかで

苦しみのなかで

静かに静かに

満ちてくるもの

やがて大地の魔法がわたしを空へと誘う

苦しみの力を大地で支える力に変えながら

闇のなかで育てられた力が芽吹き

空へ空へとほるかに飛翔していく

☆風遊戯《発芽》ノート

◎シユタイナーは、四大霊のひとつ「グノーム」(根の精霊、土の精霊)について、宇宙万象の、万有の理念を、地球の内部で、本来、担う者であるといっています。が、また地球自体、大地を嫌悪しているともいっています。地上は、グノームたちにとって、最も逃れ、避けたいものであると。なぜなら、地上は、グノームたちに対して、「両生類、蛙や蟻蛙の姿になってしまう危険を絶えず作り出すからです。だから、グノームたちは、大地と癒着しすぎて両生類の姿にならないように、絶えずジャンプしながら、土の姿に対して絶えず抵抗しているというのです。そして、その力が植物の上方へと成長する力になっている。グノームたちの地上に対する反感で、植物の根だけを土領域に属させ、根以外の部分を土領域から引き出し、上方に向かって成長させるというわけです。

◎わたしたちの四苦八苦という、地上では避けることのできない苦しみというの、これに似ているのではないかと思います。そして、四苦八苦に負けてしまうと、わたしたちはカエルに変えられてしまうことになる。そうならないように、私たちは、そういう四苦八苦への嫌悪そのものを逆説的に、かつそれを変容させる仕方、大地的な支えにしながら、天へと向かう力に変えていかなければならないように思うのです。

◎自分のなかにいまあるさまざま苦しみ。それらは私たちの「種」だと考えることもできます。四苦八苦に負けてしまうと、その「種」は発芽し、成長していくことができます。苦しみの力を熟成させて、大地への力となるもの、天への力へとなるものをそこできちんと熟成させていかなければならない。それを「静かな種の踊り」としてイメージしてみました。その静かな踊りとしての内的な魂の強度と外からの働きかけがいまあって、はじめて発芽し、成長していく「自然(じねん)」の力へとなるのだと。

《見者》

見ることはむずかしい
光を見ることができないように
見ることができるのはただ
はね返されたものだけなのだから

わたしは見る
すると
わたしはそれに
はね返されて
それに入ってはゆけない

わたしは聴く
すると
わたしはそれに
はね返されて
それに入ってはゆけない

わたしはさわる
すると
わたしはそれに
はね返されて
それに入ってはゆけない

わたしは欲する
すると
わたしはそれに
はね返されて
それに入ってはゆけない

わたしはわたしのなかに閉じ込められ
みずからのループのなかにいる

はね返されたものとともに
はるかな憧れを抱きながら

わたしはあなたへと向かう
すると

わたしはあなたに
はね返されて

あなたに入ってはゆけない
あなたはわたしの外にいて
わたしをずっと待っている

見者は光のなかにいる
わたしは見者へと向かおうとし
門前にたたずんでいる

門衛は言うのだ
おまえはまだ

この門を入れることはできない
おまえが見ようとするなら

おまえの目は焼き尽くされてしまうだろう
おまえが聴こうとするなら
おまえの耳は裂けてしまうだろう

門を入れるためには
長い道を歩まなければならない
おまえはおまえのなかに

入ってゆかなければならない
おまえ自身をはね返すことのない
生と死を超え

彼岸と此岸を超えた
時の奥行きにある道を

☆風遊戯《見者》ノート

◎わたしがなにかを欲して、それを得ようとすると、それを得ることで得られたなにかが遠ざかってしまう。空腹のときおなかを満たすと、もう食べたいとは思わなくなるように。欲望が果てしないのは、それがほんとうは何を満たそうとしているのがわからないからだ。ただその時の欲望を満たすことだけに向かい、その満たすということはわからないでいる。そしてドラッグが身も心を滅してしまふように、それらの欲望でわたしたちはみずからを傷つけてしまいかねない。

◎わたしは「欲望の門前にいる」ともいえる。その意味で、決して見ることでできない光のなかに入っていくように、わたしはそれらの欲望そのものなかに入っていくかなければならないだろう。そのときその欲望の意味がわかるのかもしれない。

◎彼岸に向かおうとしていくら長い道を歩んだとしても、それが此岸を避けるためのものであるならば、それらの道はどこにも行き着けない道となる。光の進む彼方は、彼方にはなく、光のなかにあるように、わたしはわたしのなかへとはいっていかなければならない。それがあなた／彼方へと向かう、時の奥行きにつながっている道なのだろうと想っている。

◎その意味で、感覚は感覚が求めるものへと向かうのではなく、感覚そのものの中へと入っていくことではじめて、得られるものがあるのだろうと思う。芸術もその意味でとらえてみることで、そこで使われている感覚や思考や感情の質の部分をとらえることができるようになるのではないかと思っている。ただ感覚を、思考や感情を、外的に行使するように見える芸術とされるものは、その意味で注意が必要なのかもしれない。それはただそこにただ自分を反射させた亡霊を見るだけなのかもしれないのだから。